

# 緑のまきば

1979 No. 16

小金井緑町教会  
小金井市緑町四一六一三三  
電話〇四三三八一七九六一  
編集 牧師 山本圭一

## 教説

### この嵐の中に (マタイ14章22-33)

山本圭一

I 「気をつけて、静かにし、恐れ  
てはならない」(イザヤ7章4)  
スリヤとエフライムが同盟して南  
ユダに攻め込もうとした時、アハ  
ズ王の心と民の心とは風に動かさ  
れる林の木のように動揺した。す  
でに予言者イザヤはその子にシャ  
ル・ヤシュブと命名した。旧約聖  
書の予言者のうちには、自分の子  
どもに対する命名によつて自らの  
預言内容を明らかにしようとした  
人たちがいた。紀元前8世紀の予  
言者イザヤも「残れる者帰り来ら  
ん」というシャル・ヤシュブの名  
に托して、彼の預言の神髄を吐露  
したのである。

神は自らの栄光のため残れる民  
をこの動乱の中に召される。恐れ  
る必要はない。気をつけるとは自  
分を見守ること。静かにするとは、  
鳥が巣籠るように新しい生命の誕  
生のため耐えて、しかし目覚めて

いることであつた。  
教会が歴史と浅はかな人間の動  
乱の中に立つとき、真実の勇氣は  
神の前に、神のことばを聞くべく  
静かにするところより生れる。沈  
黙は人間の根本構造をなすもの  
一つである。(ピカート)

### II

静寥(せいろ)の必要は騒乱の時のみでは  
ない。得意の後に襲う危機にこそ、  
人の魂はさらに何かを失う。愛を、  
祈りを失うのである。静寥を失つ  
た人間はそれとともに一つの固有  
の性格を失つただけではない。そ  
のために自己の構造全体において  
変質されてしまったのである。

主イエスは五つのパン二ひきの  
魚で五千人を養われた後、群衆を  
解散させ「祈るためひそかに山へ  
登られた。夕方になつても、ただ  
ひとりそこにおられた。」  
このひとりは孤独 (loneli-

ness)ではない。神の前の静寥(soleilude)こそ主イエスの本質であつた。(P・ティリッヒ)  
「われらのため あまつ園に  
今なおとりなす 主をぞ仰ぐ」  
(讚美歌三〇七ノ五)

主は、父なる神との全き信頼に  
おいて比類のない静寥を祈りの中  
に湛え、誰よりも豊かにひとりお  
られる。それは「われらのため」  
とはいへ冷酷と敵意をもつて人と  
対し、しかも事実自らの孤独の苦  
しみを楽しみつゝ、自ら選んだ孤  
独の中に逃げこむわれらを執りな  
し、豊かに、ひとり祈りたもう。

### III

ガリラヤ湖の早朝の逆風は烈し  
かつた。弟子たちを乗せた舟は波  
に悩まされ陸に近づくことができ  
なかつた。しかし夜を徹し夜明け  
の四時ごろまで主の静寥は、万物  
を覆つていた。やがて静寥は相を  
変え主は、嵐の中の弟子たちを求  
めて歩きまわられた。25節「海  
の上を」(エビ、テス、サラセス)

「テベリヤの海へ、」(ヨハネ21  
章1)と同語で、海への意を含む。  
「歩いて」の意は弱い。弟子たち  
を求めてその海べを波をかぶりな  
がら烈しく歩きまわられたにちが  
いない。26節の「海の上」はエビ  
テン、サラサンが原語で「海の方

へ」の意を含む。嵐をもものもせ  
ず弟子を気づかう主の気迫は、こ  
の世のものではなかつた。

海の上を歩く幽霊と弟子たちに  
映つた奇蹟的表現こそ、はげしい  
愛の豊かさを逆説として示す。真  
実な愛に出会つて人々の沈黙は破  
れた。おじ惑い恐怖のあまり叫び  
声をあげた。自らのみじめさを冷  
酷とも思わず耐え得る人があるだ  
ろうか。イエスに会う時に、人は  
思はず叫ばざるを得ない。人間の  
悲惨は叫びにしか現わし得ないの  
だ。

風を見て沈みそうになつたペテ  
ロは、イエスより視線をそらした  
結果、不信の淵に落ちた。「主よ、  
お助けください」人間の悲惨の中  
にはとばしる叫びを主に向つてあ  
げたペテロ。しかし彼はこの叫び  
とともに孤独より完全に立ち直つ  
た。なぜなら主がペテロと二人、  
舟に乗り込まれると風はやんだか  
らだ。ペテロは主と共にあつて人  
間の窮境の深さを徹底的に、とし  
て創造的に体験したのである。

おゝ叫びよ、拜するため、主  
の静寥にあずかろう。「現代世界  
の状態、いや生活全体が病んでいる。  
もし私が医者であつてどうすればよい  
かと相談をうければ、私はこう答える  
だろう。『静寥を、創れ』(キルケゴール)